

シンポジウム「リテラシー研究の最前線 ―西欧中世史から―」
 についてのコメント

有光秀行

史料がいかに史料化され、またいかに利用されたかを、つまり史料論を語る上で、リテラシーの問題がその根底をなすことはいふをまたない。今回のシンポジウムではそうした問題の重要性をふまえて、報告者三者三様の、だがそれぞれに充実した発表がなされた。若干の私見をまじえつつ、それらの内容をまとめ、質疑応答のおおまかな内容とともに提示することを拙文は内容とする。

岡崎氏（氏は当日司会も務めた）による報告は、シンポジウムの趣旨説明を兼ねるものであった。当日配布されたレジュメによれば、リテラシーを論じる「基本的な前提」を確認した上で、3つの論文を元に、英米・仏・独それぞれの学界の動向を述べるのが構想されていた。じっさいには時間の都合で、氏が仏・独学界について用意された内容をかなり割愛せざるをえなかったのは残念ではあったが、「リテラシー研究」が中世史のみならず、学問全体におよぶ広い射程を持つとするその展望は、解釈学やマクルーハン、ギアツ、前田愛なども動員しての説明の中で、説得的に裏付けられていた。また、リテラシー概念の柔軟化の中で、文字のみならず口頭所作、図像、音声、記号などが複合的にからみあうところ、つまり意味が発生する場が、そして相互理解の弁証法が問題にされるようになっていて、これがたとえば翻訳や過去語り、また紛争解決などなどのテーマにもつながってくる、という指摘は特に印象に残った。「コードの解読骨子がどう生まれ、変化するか。そこにどういう権力基盤が働くか、が問題である」とする結論部の3つの指摘、つまり①リテラシーは複数の層を持つ、②実践の場がキーワードである、③意味づけの与えられ方、つまり「解釈の解釈」の歴史学が大事である、は、ここでも改めて記しておくに値しよう。なお個人的には、アベラールとトマス・アクィナスを対比しつつ提示された、「われわれはある作品をなぜ作品と認識するか？」という問いも心に残った（前者が、変化する「前近代的」テキストをものする一方、後者は「近代的な」「完成された」著作を生んでいった）。

梅津氏の報告は3つの部分からなる。はじめに、10世紀頃までのヨーロッパの多言語（ラテン語・ゲルマン語・ロマンス語）状況が整理された。ここで印象深かったのはラテン語の発音と綴りの問題であり、古代においてすら両者には乖離が見られたが、フランク時代においてはたとえば *virgo* の対格・与格・奪格はどれも「ヴィルジャ」と発音され、だがそれで意思疎通はしっかり成立していたという。だがその後、アルクインによる改革を経た発音は多くの人に理解しがたいものとなり、結局話し言葉としてのラテン語はその命脈を絶たれることになった。第2部は中世初期のリテラシーについて、教会がそれを独占していた、とする通説に異を唱えたマキタリック、および彼女を中心とする人々の研究成果を整理し、またその中で「史料の谷間」およびラテン語の転換期として、8世紀に注目す

る。第3部はそれをうけ、「読み書き」のもっとも日常的な焦点となった王文書について、694/5年、781年、882年のそれを取り上げ、書体や分かち書きの有無などの点から、年代を追うごとにわれわれにとって、またおそらく当時の人にとっても読みやすくなること（ローマから離れることでもある）がまず確認された。その上で、また上述の、音と綴りが一対一に対応しない状況を踏まえた上で、文書作成時の読み上げ役と書き手の働きなどについて、具体的な推論がなされた。今回梅津氏が指摘されたこの、音と綴りの関係は、私は初めて知るものであり、当日言及があったように、書き手のラテン語能力についての考察にも道をひらく視点である。梅津氏の堅実な学界整理の手際と並んで、たいへん印象に残った。氏の、「言語学との共同作業が大事ではないか」との提言は大いに共感できる。

岩波氏の報告の焦点は、副題が示すようにミュンスター大学中世研究所を中心としたドイツ中世史におけるリテラシー研究の動向紹介にあったのだが、それが伝統的史料学とのかわりの中で出てきていることを示すべく、話は19世紀から説き起こされた。MGHやオーストリア歴史研究所、ミュンヘン大学史学科といった組織が、密接な人的（徒弟的）つながりを持ちつつ展開し、そこでは伝統的史料学（史料の校訂に力点を置く）が重視されたが、それとは異なる研究手法（史料の文脈に着目する）をもって台頭したのが、ミュンスター大学中世研究所であった。同研究所が1999年まで約15年、ドイツ学術振興会の研究資金を得て展開したプロジェクト「中世における実務的リテラシーの担い手、領域、形態」の、15の個別プロジェクトのテーマと指導者、発表成果を紹介し、その具体的な活動ぶりについて聴衆にイメージを与えたのち、岩波氏はミュンスターの成功の背景として、以下の3点を指摘する。つまり個々の研究者の高い資質（特に中核にいた3正教授）、基礎としての伝統的歴史学（特に一次史料の扱い）、そしてそれらに加え、「メモリア研究」（つまり死者祈禱をおこなう記憶の担い手の研究）の第一人者だったシュミットとミュンスターとのつながり、である。ちなみにミュンスターでのリテラシー・プロジェクトは1999年で終了し、中核を担った研究者達も交代して、現在ではアルトホフを中心とした象徴的コミュニケーション研究プロジェクトが始動しているが、アルトホフはシュミットの愛弟子であった由である。以上が岩波氏の報告の主な流れである。この報告が、ミュンスターのプロジェクトを通してドイツ学界のリテラシー研究を見事に紹介しているばかりでなく、近現代ドイツ中世史学史の潮流のすばらしい描写、しかも研究者の具体的人的つながりをふまえたそれになりえている点に、私は大いに感じ入った。日本の西洋史学史を今後語る上でも、ダイナミックさと繊細さとをあわせもった岩波氏の報告は範となるに違いない。ちなみに、氏は上記のプロジェクトが本邦のCOEとニアリーイコールであるとも指摘したが、競争的資金と無縁ではいられない現代日本の一大学人として考えさせられるものがあった報告であることも、付け加えておきたい。

当日のコメンテーターを務めた永嶋哲也氏は、クランチによるアベラール伝から、リテラシーに関わるいくつかの箇所を抜粋・紹介したうえで、いくつか質問をした。たとえば、中世初期と後期の断絶性・連続性を巡る問題である（たとえばアルクインの哲学はボエテ

ィウスの切り貼りであってトマスのそれとは異なるが、これは単なる情報量の違いか、それとも質の違いがあるのか)。岡崎氏はこれに対し、1200年頃から文字が急に流布したように見えるのは確かだが、一般論をしても仕方がなく、具体的に何を問題とするのかと密に関わってくることだ、という趣旨の回答をした。また、リテラシー研究の対象のひろがりを感じたが、ひろげすぎてはならないのでは、もしくは本来のリテラシーを見失ってはいけないのではないかと、との指摘もなされた。これをうけて岡崎氏は、リテラシーにあたるのはフランス語で言えばクルチュール・デクリ、ドイツ語で言えばシュリフトリッヒカイトであるが、それぞれの間にニュアンスの違いがあって、リテラシーとは何かをはっきりさせられない面がある、という趣旨のことを述べた。また永嶋氏が女性のリテラシーをひとつの話題としてあげた(「教会エリートによる文字独占」への異議申し立て)のをうけ、梅津氏は女子修道院と男子修道院の違いを考える必要を指摘し、岩波氏はヒルデガルト・フォン・ビンゲンの語りとその筆記者との関係について研究の知見を披露した。

フロアに議論が開かれてからも、活発に意見交換がなされた。「リテラシー」とは何か、このことばはこのところレッテル的に使われてきているが、定義もしくは概念の精密化は可能か、もしくはそのことに意味はあるか。文字文化と口承文化の相互関係は、「解釈共同体」内の表象解釈をめぐる争いも大事ではないか。近代では、エリートはバイリンガル(ラテン語と俗語)・バイカルチュラル、民衆はモノリンガル・モノカルチュラルとされるが、そのことについてはどうか(これに関しては、エリートの俗語と民衆の俗語がまったく違うという指摘もあり、また年代記や国王文書といった史料ジャンルと、ラテン語との関わりも問題になるのではという意見もあった)、などなど。

もとより個々の論点については、それぞれ容易に結論が得られるものではなく、岡崎氏が指摘するように、個別具体の状況の中で問題が設定され解かれねばならないことは言うまでもない。ただ、繰り返しになるが、そうした中で何が出てくるかの具体的な提示(梅津報告)、および20世紀を中心とした知的潮流の中でのリテラシー論の位置と射程の提示(岡崎報告、岩波報告)はそれぞれ大いに説得的であり、刺激的であった。